

大学における地域子育て支援活動を考える

— 乳児期・子育て支援グループ活動の実践 —

柳瀬 洋美

本研究は、地域に開く親子参加型の保育・子育て支援グループ活動として、地域在住の 0 歳から概ね 2 歳までの乳児とその家族（親・きょうだい等）を対象として行われている「乳児グループ活動」について、その特徴と活動意義を分析・考察し、今後の活動の発展に向け、その方向性と可能性についての探求を試みたものである。

その結果、乳児期の子育て支援に対するニーズは非常に高く、こうした子育て支援活動が大学で行われていることに魅力を感じる人も多いということがわかった。また、こうした活動が、子どもや親自身にとってはもちろんのこと、学生の育ちにとっても重要な役割を果たすということが示唆された。

キーワード：現代社会の変容，子育て支援，乳児グループ活動，個と集団の相即的發展，次世代の育成

1. はじめに

近年、現代社会の変容が家庭や家族におよぼす影響が指摘され、子育ての孤立感や閉塞感、不安感等を訴える親が増加している。少子化問題や虐待問題といった、子どもと家族をめぐる諸問題がクローズアップされる中、子どもとかわりのある現場において様々なグループ活動が行われるようになった。その目的は子ども自身の教育・保育に関するものから、子育て支援等、保護者を対象としたものまで多様であるが、人間関係の希薄化や地域社会の子育て力の低下が指摘される中、こうした子育て支援グループ活動が果たす役割は大きいのではないだろうか。

本学では、すでに地域に開かれた親子参加型の保育・子育て支援グループ活動として、2 歳以上の未就園児を対象とした「幼児グループ活動」が行われており、20 年以上にわたる実績を積み重ねている。

また、本研究の対象である「乳児グループ活動」については、その前身として、卒業生とその子どもたちが定期的に集まって交流する自主グループ「ちびっこくらぶ」が 10 余年におよぶ活動をおこない、本学教員と学生も補助的に参加してきた。この自主グループは参加者が卒業生ということで、母校に支えられているという安心感のもと、ある種の子育て支援的な役割も果たしてきた。

その後、本活動は 2006（平成 18）年度をもっていったん終結となるが、翌 2007（平成 19）年度、本研究ら教員と学生が中心となり、新しく子育て支援自主研究グループ「ぼかぼかひろば」を設立、参加対象者も地域在住の 0～2 歳の乳児と保護者に広げ、活動を開始した。

なお、本学での活動は大学で行われているが、一般によくある「子育てに関する研修や講座を親子が受講する」というものではなく、同じグループ活動に学生や教員も「共に参加する」という特色をもった活動である。そのため、参加している親子のみならず、これから社会へと旅立ち、次世代を担っていく学生たちにとってもまた、大変有

意義な活動ではないかと考えている。

2. 目的

本研究の主な目的は、新規に始まった「乳児グループ活動」の特徴や意義について分析・考察し、今後のさらなる充実と発展に向け、そのあり方や方向性のさまざまな可能性について探求することにある。

乳児・保護者（家族）・学生・教員ら全ての参加者ひとりひとりが互いに尊重しあいながら、個としても集団としても共に育ちあっていける（個と集団の相即的發展）活動を展開していくには、どのようなあり方が望ましいのか、今後の活動のあり方を模索する上での貴重な手がかりとしたい。

3. 方法

まず、対象である「乳児グループ活動」全体の概要や特色、意義について整理し考察する。

その上で、過去2年間の活動について、毎回の活動記録・ひとことカード（毎回の親の感想）・乳児グループ活動全体についての保護者対象のアンケート（前期終了後の夏期休暇中および年間の全活動終了後の計2回実施）の内のいくつかの項目・参加学生の感想およびアンケート（年間の全活動終了後に実施）をもとに、活動参加者の動機やニーズ、また活動を通して得られた気づきや変化について分析・考察する。

なお、本研究の対象者および対象期間は表1の通りである。

4. 結果

(1) 「乳児グループ」活動の概要と特色

本研究の対象である「乳児グループ」活動の概要は以下のとおりである。

<グループ名称>

「乳児グループ（通称：ぼかぼかひろば）」

<活動開始までの経緯>

2007（平成19）年度に「子育て自主研究グループ」として活動開始、2008（平成20）年度には「児童学総合演習」の1つとして「乳児グループ」活動を行う。

表1 研究対象者および対象期間

*（ ）内の数字は、その内の後期からの参加者数

参加者 / 活動年度 (年齢は参加当初時)	2007年度	小計	2008年度	小計	計(延べ 人数)
0～1歳	7 (1)	13	7 (3)	13	26
1～2歳	6		3		
2～3歳	0		3 (3)		
保護者（主参加者）	13 (1)		11 (5)		24
学部生（4年生）	6		4		10
大学院生	0		2		2
教員	2		1		1

<活動目的・意義>

本活動の主な目的と意義は以下の4点である。

親と子がほっとできるような「居場所（子育てひろば）作り」を通し、大学内における子育て支援活動という特性を生かし、親と子・学生・教員が出会い、共に育ちあう子育てをめざす。

ひとりひとりの子どもたちの成長や個性を大切に、共にゆったりとした時間を過ごす中で、心豊かで多様なかかわりを育む。

参加者同士がお互いに子どもたちの様子を見守りながら、子育て等についての話し合いや情報交換をおこなう。

学生にとっては、直接、乳児や保護者と接することで、乳児期の子どもの成長を実感し、また保護者の思いを受けとめ共感理解する力を培う上で貴重な経験の場となる。また、保護者にとっても他の親子とのかかわりを持つことで、自身の子育てを見つめ、視野を広げることができる。

<参加対象者>

概ね0～2歳の乳児10人程度とその保護者および家族（参加登録制）、および児童学を学んでいる学生（学部生・大学院生）、教員から成るリーダーチームによって構成される。

<活動概要> ～ 2008年度活動より

活動期間・回数および活動時間

- ・「ひろば」活動は、5月～12月の各月2回程度（年間全12回）
- ・1回の活動：10:40～13:00
（昼食休憩時間12:10～13:00を含む）

- * 活動は、前期(5～7月)、後期(10～12月)の2期に分かれており(8,9月は夏期休暇)、後期からの参加も可能である。

これは、乳児対象の子育て支援ということで、参加の機会を年度当初の1回に限定せず、産後早期の支援が可能となるよう考慮したものである。

- * なお、毎回の活動後には、リーダーチームによるその回のまとめと話し合いや参加者へ宛てたおたよりの作成を、また「ひろば」がない週は次の活動の準備などをおこなっている。

年間の主な活動内容

前期(5月～7月)計6回

- ・出会いを楽しむ
- ・七夕

夏期休暇(8・9月)

- ・前期アンケート実施
- ・夏のたより(学生から)

後期(10月～12月)計6回

- ・再会と新たな出会いを楽しむ
(後期からの参加者を迎えて)
- ・お楽しみ会(KVA祭)
- ・クリスマス会
- ・年度末アンケート実施

1回の活動の流れ

乳児の活動ということで子どもひとりひとりの成長や興味・関心の発達に応じた遊びを大切に活動を行っている。ただし、毎回の活動の最初と終了近くに、お名前呼びや手遊び、歌を中心とした活動を取り入れている(スポットタイム)。同じ活動を共有する仲間を意識し、また、特に積極的な親と子の分離は行わず、同じ室内にコーナー(以降、サロンコーナーとする)を設置する形で、親同士の情報交換や相互交流を行っている。

活動内容の特徴とリーダーのかかわり

基本的には、乳児であるということで、親子が共にリラックスして過ごせる場であることをまず大切にする。その上で、個々の課題や状況に応じたかかわりや活動内容の工夫・配慮をしていく。

10:40	活動開始(ぼかぼかひろばオープン)
	[親子合同活動・前半]
	・参加児のお名前呼び
	・自由遊び
11:15	
	[親子分化活動]
	・親グループ活動(サロンコーナー)
	・子グループ活動(自由遊び)
11:40	
	[親子合同活動・後半]
	・手遊び・歌遊び(スポットタイム)
12:00	さよならの歌
12:10	ひろば活動終了
	*終了後、希望者は自由に昼食休憩
13:00	全活動終了
	(*時刻はおおよその目安)

また、グループにかかわるリーダーのあり方については、1人がリーダーとして強く集団全体への方向性を打ち出すということではなく、複数の指導者がリーダーチームとして、L₁、L₂、L₃という3つの役割*を互いに連携し担いあいながら乳児グループ活動を展開している。

L₁ L₂ L₃は、集団活動を促進する機能として、方向性機能(=集団活動の方向を明らかにする機能)、関係性機能(=集団活動において、人との関係、場面、方向との関係等、さまざまな関係の発展を促進する機能)、内容性機能(=集団活動における個々の自発的な活動を促進し内容を作っていく機能)という3つの機能を具体的な活動の中で把握し、そのことをふまえた指導をしていく必要がある。

- * L₁は、集団活動全体をとらえ、活動の方向を明らかにしたり、他のリーダーと連携を取りながら、参加者同士の関係発展を促進する場面設定や役割付与をする。(例:活動全体の進行、サロンコーナーでの話し合い、スポットタイムの司会等)

L₂は、活動場面において参加者の自発的活動を促進したり、参加者同士の関係が発展する役割付与、場面設定をする(例:子どもの遊び

を全体に発展・展開する，話し合いやすい状況を作る等)

L₃ は，周辺のいる参加者に即して働き，その参加者の自発的な活動を促進しながら，他の参加者との関係や全体集団状況との関係の発展をはかる。(例：集団から離れたところに我が子という親に寄り添う，他の参加者との間をつなぐ，親グループ活動の状況を伝える等)

(柳瀬 他，2008)¹⁾

その他

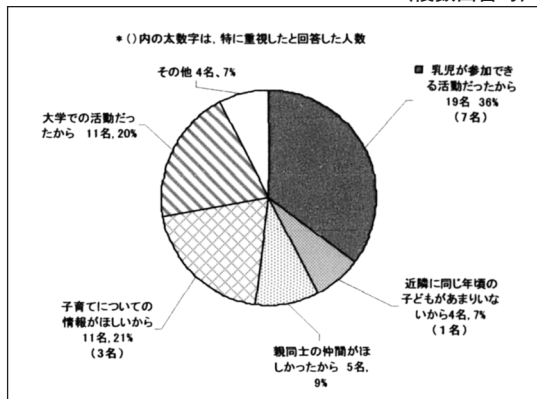
個々の成長や発達の差異が大きい乳幼児期においては，きめ細やかな個に即した支援は重要である。そこで，グループ活動と並行して，希望者に対しては個別相談にも応じている(本研究者は臨床心理士有資格者)。

(2) 乳児グループ活動への参加動機と期待

2007 年度・2008 年度の参加保護者(回答者総数 19 名)を対象としたアンケート結果から，乳児グループ活動(子育てひろば)に参加を希望した理由は図 1 にあるように，「乳児が参加できる」がもっとも多く，次いで「大学での活動だったから」となっている。この内，特に重視した理由では，「乳児が参加できる(7 名)」が最も多く，次いで「子育ての情報ほしかったから(4 名)」，「近隣に同じ年頃の子どもがいないから(1 名)」が挙げられている。

図 1 ひろばに参加しようと思った理由

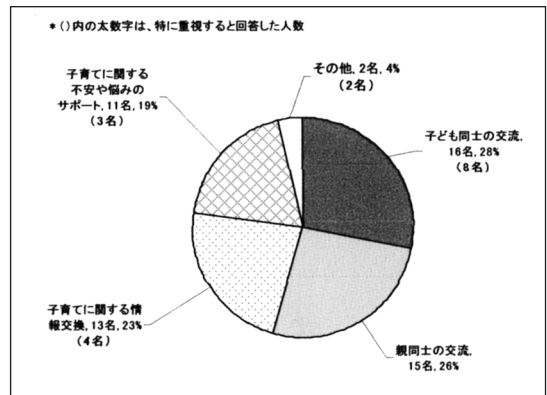
(複数回答可)



次に，活動への期待に関しては，図 2 のような結果が得られた。多く選ばれた順に「子ども同士の交流」「親同士の交流」「子育てに関する情報交換」「子育てに関する不安や悩みのサポート」となっているが，項目間にそれほどほどの差はみられなかった。また，特に重視する項目としては「子ども同士の交流」を選んだ人がもっとも多かった。

図 2 子育てひろば活動に期待するもの

(複数回答可)



(3) 子育ての大変さとそれをサポートする環境

2008 年度の保護者対象のアンケート結果から子育ての大変さについて表 2 のような結果が得られた。データ数は少ないが，第 1 子に対して感じる大変さと，第 2 子以降に対して感じる大変さの

表 2 子育てを大変と感じるか

(着色部分は第 1 子)

回答者(母親)	子育ての大変さ (大変さを「感じる:5」～「感じない:1」の5段階評定)		
	参加児	きょうだい(上)	きょうだい(下)
	A	5	
B	2	4	
C	2	5	
D	4		
E	2	3	
F	3	4	
G	5	5	
H	2	4	
I	5		5
J	4		
K	1	1	1

平均値を比較してみると、第1子(4.0)>第2子以降(2.7)となり、第1子ほど子育てを大変と感じるとの結果が得られた。

またこうした大変さをサポートするもののひとつとして、身近に世間話や子どもの話をする相手がいるかどうかについて尋ねたところ、全ての回答者(11名)が「いる」と答え、主な話し相手として、同じように子どもをもった母親仲間を挙げ、次いで親・夫等の家族を挙げている。この他に日ごろ利用している一時保育の保育士などの専門家を挙げた者もいた。

(4) 活動を通して得られた気づき・感想にみる「乳児グループ」が果たす役割と意義

毎回の活動中、保護者により語られた内容や活動記録・ひとことカード、アンケートの自由記述欄などから、子どもと自分(保護者)自身について、活動への参加を通して得られた気づき・感想をまとめたところ、大きく以下のような内容に分けられた。

子どもについて

- ・ 家族以外と接する貴重な場である。
(同年代の子どもや学生とのかかわり)
- ・ 我が子の成長を実感できる。
- ・ 家庭では見られないような表情や姿をみることができる。
- ・ 人見知りや場所見知りがあったのが、集団全

体で受けとめてもらえ、慣れることができた。

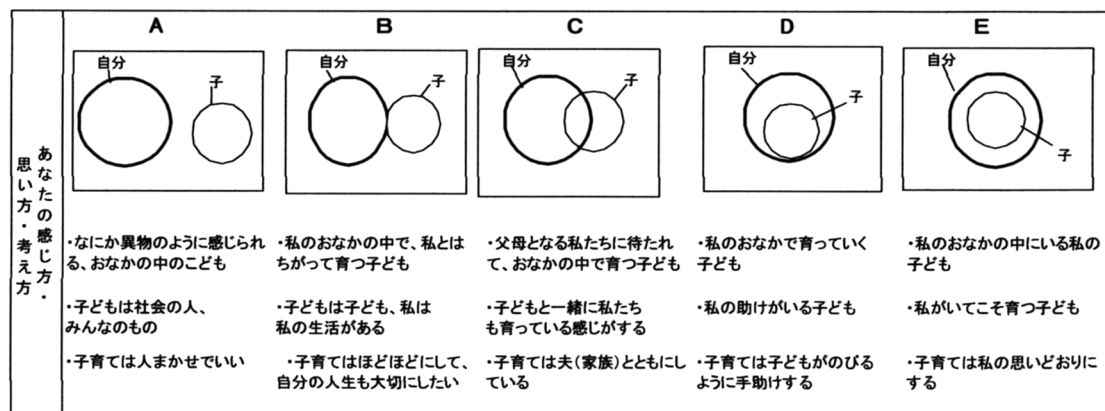
自分(保護者・親)自身について

- ・ 親同士語り合うことで、悩んでいるのは自分一人ではないと、気持ちが楽になれる。(我が子を素直にみることができるようになった。)
- ・ 他の親子をみることで、我が子や自分のことを客観的にみることが出来る。また、他の人も我が子を見てくれているという安心感があった。
- ・ 上にきょうだいがいる人など、いろいろな人と話すことができて参考になった。
- ・ 初めての子育てで不安だったが、情報交換をしたり相談に乗ってもらえて心強かった。
- ・ 学生の熱心な姿に元気をもらう。子どもと一生懸命かかわってくれ、のびのびと子どもが遊ぶ姿を見ているととてもうれしくなる。

(5) 子どもとのかかわり方

図3は親と子(大人と子ども)のかかわり方を、その特徴からA~Eの5つのタイプに分けて表したものであり、どれも時と場合によって、子どもの成長に必要なかかわり方である。これら5つのタイプについて、2008年度参加者の保護者および学生に対し、「活動参加当初」と「2008年度の活動終了後」の自分と子どものかかわり方について近いと思うものを選択してもらった。(参加児以外にも子どもがいる人には、それぞれの子どもに

図3 子どもとのかかわり図



* 原案: 松村康平/1983

についても選択してもらった。)

その結果、保護者については、ほぼ全員が子どもの年齢(月齢)に合わせたかかわり方を選択しており、授乳の必要な0歳児ではDの「私の助けがいる子ども」としてのかかわり方を選択し、離乳が完了し行動範囲が広がり始める時期になるとCの「一緒に育っている感じがする」というかかわり方へと移行していく。しかし、中には、子どもの年齢にかかわりなく、親自身の心理状態やその時の親子関係の状態により、当の親子にとって望ましいかかわり方ではない場合もみられ、このような場合には、その親子に即した丁寧なサポートが必要と考えられる。

一方、学生については、全員が参加当初はDを選択していたのが、年度終了時にはCを選択し、乳児に対する意識や姿勢の変化が感じられた。

5. 考察および今後に向けて

昨今は少子化の影響や子育て支援への関心の高まりもあり、早期の習い事や未就園児クラスの開設、子育てサービス産業などが盛んになってきた。

しかし、その多くが2歳以上の幼児を対象としたものであり、0～2歳の乳児が出かけたり過ごしたりすることのできる場はまだまだ少ない。実際、今回の研究でも、乳児期の子どもと共に過ごす場への強いニーズが感じられた。

とりわけ、第1子の子育てについて不安や大変さを感じる親が多く、そうした思いを受けとめてくれる人や場が身近に存在するということは、子育て中の親にとって重要な子育て支援となる。

ただし、子育てサービスと子育て支援とはちがう。子育て支援では、ただ単に親の要望に応えるのではなく、何を「育てるのか」という視点が大切である。

また、今回の研究で、参加者の多くが、本活動が大学での活動であることにも魅力を感じていることがわかった。その理由の詳細の分析は今後の課題とするが、アンケートや感想から、より専門的な支援や子育てに関する情報や知識が得られるのではないかと期待があるのではないかと推察される。学生という、日常生活では接する機会の少ない存在も魅力の一つと考えられ

ているようである。

その、学生についてであるが、本活動に参加している学生の大半が保育実習はじめ、これまでも子どもとかかわる機会を何度か持っている。中にはボランティア活動に積極的に取り組んでいる学生もいる。しかし、保護者や家族とじっくり接する機会はまだまだ多くない。したがって、本活動は学生たちにとって、非常に貴重な経験の場である。かかわり方についてのアンケート結果からは、「赤ちゃん・小さな子ども=助けられるべき存在」とのイメージが強かったのが、実は自分たちも共に育っていくのだ、というように、乳児に対する認識に変化がみられた。

こうした乳児に対する意識や姿勢の変化は、活動を通して、また活動後の話し合いや感想からも感じられた。乳児グループ活動に参加したことがきっかけで、それまで乳児とどう接していいか戸惑っていた者が目を輝かせて生き生きと子どもたちと活動を楽しむようになったり、保育の道を強く志すようになったり、学生たちにとっても、こうした活動はその後の自分たち自身の成長に大きく影響しているのがうかがえる。

また、学生たちが乳児と出会い、共に育っていく姿は、初めて我が子を抱いた母親が、親として成長してゆく過程とも重なる。

本活動はまだ始まったばかりであるため、研究対象となるデータも少なく、数量的な分析はまだ難しい。そうした事情もあり、今回の研究では、活動全体の意義や目的の分析・考察や、今後の方向性について探ることに焦点を当てたため、詳しい子ども自身の変化や親へのアプローチについては触れることができなかった。こうした事例的な研究も今後の課題としていきたい。

この他、今後、考えていかなければならない課題として、非常に成長や発達に年齢差が大きい乳児期において、どのような活動を展開していったらいいのか、どのような工夫や配慮が必要なのが挙げられる。

1回1回の活動を大切に、また、今回の研究で得られた考察を今後の活動に生かし研究を重ねていく中で、参加者ひとりひとりにとって、この

「乳児グループ活動」での経験が少しでも役立つものとなるよう、また、大学でおこなわれているということが特色としてより生きるような、地域子育て支援のあり方について探求し続けていきたい。

引用文献

- 1) 柳瀬洋美・中村洋子・鈴木百合子『大学における幼児グループ活動の展開 親グループ活動にみる個と集団の相即的發展』(東京家政学院大学紀要 48, pp.35-44, 2008)

参考文献

- 1) 関係学会・関係学ハンドブック編集委員会編『関係学ハンドブック』(関係学研究所, 1994)
- 2) 五味重春・田口恒夫・松村康平監修 幼児集団指導研究会編『幼児の集団指導 - 新しい療育の実践 -』(社会福祉法人日本肢体不自由児協会, 1979)
- 3) 厚生労働省『子ども・子育て応援プラン』(厚生労働省雇用均等・児童家庭局 総務課少子化対策, 2005)
- 4) 中野敬士監修・社団法人全国私立保育園連盟経営強化委員会 編『地域子育て支援のいろは』(筒井書房, 1999)
- 5) 菅井正彦『子育て支援は母親支援』(子育てブックレットまいんど 50/51 合併号, 神奈川県児童医療福祉財団 小児療育相談センター, 2001)
- 6) 柳瀬洋美『こころむ親支援 現代の子育て不安とこころの自立』(家庭教育研究所紀要第25号 日立家庭教育研究所, pp.13-23, 2003).
- 7) 吉川晴美編『子育て発達支援 - 地域に開く大学として共に育つ保育活動から -』第 巻(東京

家政学院大学 児童学研究室 地域に開く子育て・発達支援研究会, 2001)

- 8) 吉川晴美編『子育て発達支援 - 地域に開く大学として共に育つ保育活動から -』第 巻(東京家政学院大学 児童学研究室 地域に開く子育て・発達支援研究会, 2002)

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、多くの方々にご協力いただきました。本乳児グループの基礎となる、卒業生による自主グループ「ちびっこくらぶ」の活動を長年支えていらっしゃった鈴木百合子教授には新しく乳児グループ「ぼかぼかひろば」の活動を始めるにあたり、ことばに尽くせぬほどのご支援をいただきました。吉川晴美教授には、同じく本学内における子育て支援グループの大先輩に当たる「幼児グループ」活動への参加を通し、さまざまなことを学ばせていただきました。田尻さやか助手には、初年度、自主研究グループの活動を支えていただきました。

そして、毎回の活動を楽しみに来て下さったお子さんたちと保護者のみなさま、どうもありがとうございました。みなさまの笑顔が何よりの支えでした。

最後に、活動を共に作り上げてきてくれた学生のみなさん、本当にありがとうございました。学生のみなさんの力なくしてはこの活動はできなかつたと思います。本活動での経験が、社会へ旅立つみなさんの、少しでもお役に立てばこれ以上の幸いはありません。

全てのみなさまに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

(2009.3.27 受付 2009.5.20 受理)